

# 「イエス・キリストの受肉」

ヘブル書 2章5～18節

そういうわけで

子たちがみな、血と肉を持っているので  
イエスもまた同じように

それらのものをお持ちになりました。

それは、死の力を持つ者、すなわち

悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし

死の恐怖によって、一生涯奴隷として

つながれていた人々を、解放するためでした。

当然ながら

イエスは、御使いたちを助け出すのではなく  
アブラハムの子孫を助け出して

くださるのです。

したがって、神に関わる事柄について  
あわれみ深い、忠実な大祭司となるために  
イエスはすべての点で  
兄弟たちと同じように  
ならなければなりません。

それで、民の罪のなだめが、なされたのです。

イエスは

自ら試みを受けて、苦しまれたからこそ  
試みられている者たちを、助けることが  
できるのです。

## 本日のポイント

- I. キリストの受肉は、人が失った支配を回復した
- II. キリストの受肉は、人を救いの栄光に導かれた
- III. キリストの受肉は、サタンを武装解除し  
死より救出してくださった
- IV. キリストの受肉は、ご自身をあわれみ深い  
大祭司とされた

I. キリストの受肉は  
人が失った支配を回復した

2章5~9節

というのも、神は、私たちが語っている  
来たるべき世を

御使いたちに従わせたのではないからです。  
ある箇所で、ある人がこう証ししています。

「人とは、何者なのでしょう。」

あなたが、これを心に留められるとは。

人の子とは、いったい何者なのでしょう。

あなたが、これを顧みてくださるとは。

あなたは、人を御使いよりも

わずかの間、低いものとし

これに、栄光と誉れの冠をかぶらせ、

万物を、彼の足の下に置かれました。」

神は、万物を人の下に置かれたとき  
彼に従わないものを  
何も残されませんでした。

それなのに  
今なお私たちは、すべてのものが  
人の下に置かれているのを見てはいません。

ただ  
御使いよりもわずかの間、低くされた方  
すなわち、イエスのことは見ています。

イエスは、死の苦しみのゆえに  
栄光と誉れの冠を、受けられました。  
その死は、神の恵みによって  
すべての人のために、味わわれたものです。

神は、仰せられた。

「さあ、人をわれわれのかたちとして  
われわれの似姿に造ろう。」

こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜  
地のすべてのもの、地の上をはう

すべてのものを、支配するようにしよう。」

神は人をご自身のかたちとして創造された。  
神のかたちとして、人を創造し

男と女に、彼らを創造された。

神は、彼らを祝福された。

神は、彼らに仰せられた。

「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。

海の魚、空の鳥

地の上をはうすべての生き物を支配せよ。」



神は、仰せられた。

「見よ。わたしは、地の全面にある  
種のできるすべての草と

種の入った実のあるすべての木を  
今、**あなたがた**に与える。

**あなたがた**にとって、それは食物となる。

また、生きるいのちのある

地のすべての獣、空のすべての鳥

地の上をはうすべてのもののために

すべての緑の草を、食物として与える。」

すると、そのようになった。

神はご自分が造ったすべてのものを見られた。  
見よ、それは非常に良かった。

この大能の力を

神は、キリストのうちに働かせて

キリストを、死者の中からよみがえらせ  
天上で、ご自分の右の座に着かせて

すべての支配、権威、権力、主権の上に

また

今の世だけでなく

次に来る世においてもとなえられる  
すべての名の上に、置かれました。

また

神は、すべてのものを

キリストの足の下に、従わせ

キリストを、すべてのものの上に立つかしら  
として、教会に与えられました。

I. キリストの受肉は、人が失った支配を回復した

# Ⅱ. キリストの受肉は 人を救いの栄光に導かれた

2章10~13節

多くの子たちを、栄光に導くために  
彼らの**救いの創始者(開拓者)**を  
多くの苦しみを通して完全な者とされたのは  
万物の存在の目的であり  
また、原因でもある神に  
ふさわしいことであつたのです。

聖とする方も、聖とされる者たちも  
みな一人の方から、出ています。  
それゆえ、イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを  
恥とせず、こう言われます。

「わたしは

あなたの御名を、兄弟たちに語り告げ  
会衆の中で、あなたを賛美しよう。」

また、「わたしはこの方に信頼を置く」と言い  
さらに、「見よ。わたしと、神がわたしに  
下さった子たち」と、言われます。

**神は**、そのひとり子を世に遣わし**(受肉)**  
その方によって

私たちにいのちを得させてくださいました。  
それによって

神の愛が、私たちに示されたのです。

私たちが、神を愛したのではなく

**神が**、私たちを愛し

私たちの罪のために

なだめのささげ物**(十字架)**としての御子を  
遣わされました。

ここに、愛があるのです。

…もしもキリストが

その神としての明らかな印を持って来られたならば  
人々はただちに、このお方を信じたてでありましょう。

しかし、彼らの思うところと、全く異なり

主イエス・キリストは

その栄光も、その力も

そのすべてを捨てられて

**よるべなき幼子**として、来られました**(受肉)**

それは、何のためでありますか。

他でもありません。

---

人は、**信仰**を必要とし、**信仰**を働かせて

このお方を、神の子として

受け入れさせるためであります。

ですから

私たちは、この**信仰**によって、試されるのです。

御使いたちが彼らから離れて  
天に帰ったとき

**羊飼いたち**は話し合った。

「さあ、ベツレヘムまで行って

主が私たちに知らせてくださった

この出来事を、見届けて来よう。」

そして急いで行って、マリアとヨセフと

飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。

それを目にして、羊飼いたちは

この幼子について

自分たちに告げられたことを知らせた。



…モーセの律法による

彼らのきよめの期間が満ちたとき

(イエスの誕生から、41日目、レビ記12章規定)

両親は、幼子をエルサレムに連れて行った。

………

そのとき

エルサレムに、シメオンという人がいた。

この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを、待ち望んでいた。

また、聖霊が、彼の上におられた。

………

シメオンが、御霊に導かれて宮に入ると

律法の慣習を守るために

両親が、幼子イエスを連れて入って来た。

シメオンは、幼子を腕に抱き

神をほめたたえて、言った……

また、アシエル族のペヌエルの娘で  
アンナという女預言者がいた。

この人は、非常に年をとっていた。

.....

彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって  
夜も昼も、神に仕えていた。

ちようどそのとき

彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ  
エルサレムの贖いを待ち望んでいた  
すべての人に、この幼子のことを語った。

イエスが、ヘロデ王の時代に

ユダヤのベツレヘムで、お生まれになったとき

見よ、**東の方から博士たち**がエルサレムに  
やって来て、こう言った。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は  
どこにおられますか。」

私たちは、その方の星が昇るのを見たので  
礼拝するために来ました。」

.....

それから家に入り、母マリアとともにいる  
幼子を見、ひれ伏して、礼拝した。

そして、宝の箱を開けて

黄金、乳香、没薬を、贈り物として献げた。

I. キリストの受肉は、人が失った支配を回復した

II. キリストの受肉は、人を救いの栄光に導かれた

Ⅲ. キリストの受肉は  
サタンを武装解除し  
死より救出してくださった

2章14～16節

そういうわけで

子たちがみな、血と肉を持っているので  
イエスもまた、同じように

それらのものを、お持ちになりました。

それは、死の力を持つ者、すなわち

悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし

死の恐怖によって

一生涯奴隷としてつながれていた人々を  
解放するためでした。

当然ながら

イエスは御使いたちを助け出すのではなく  
アブラハムの子孫を助け出してくださる  
のです。

サタンは、死の力を有してはいないが  
人が、死を恐れ、死の不安に悩まされるよう  
あらゆる手段を、尽くしている。



- ① 死を、考えさせない
- ② 死を、忌み嫌わせる

名声は、良い香油にまさり  
死ぬ日は、生まれる日にまさる。

宴の家に、行くよりは  
喪中の家に、行くほうがよい。

そこには  
すべての人の終わりがあり  
生きている者が、それを  
心に留めるようになるからだ。



サタンは、死の力を有してはいないが  
人が、死を恐れ、死の不安に悩まされるよう  
あらゆる手段を尽くしている。



- ① 死を、考えさせない
- ② 死を、忌み嫌わせる
- ③ 死を、まだ、先のことと、錯覚させる
- ④ 死は、まだ、自分には関係ないと  
思わせる

イエスは、人々に言われた。

「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。  
人があり余るほど持っていても

その人のいのちは財産にあるのではないからです。」  
それから、イエスは、人々にたとえを話された。

「ある金持ちの畑が、豊作であった。

彼は、心の中で考えた。

『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』  
そして言った。

『どうしよう。』

私の倉を壊して、もっと大きいのを建て  
私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。  
そして、自分のたましいに満足言おう。

「わがたましいよ。

これから先、何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」』

しかし、神は、彼に言われた。

『愚か者

おまえのたましいは

今夜、おまえから取り去られる。

おまえが用意した物は

いったいだれのものになるのか。』

自分のために蓄えても

神に対して富まない者は、このとおりです。」

ルカ 12章 15〜21節

「わがたましいよ。

これから先、何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』

しかし、神は、彼に言われた。

『**愚か者!**』

おまえのたましいは

今夜、おまえから取り去られる。

おまえが用意した物は

いったい、だれのものになるのか。』

自分のために蓄えても

神に対して富まない者は、このとおりです。」「

ルカ 12章 15〜21節

先延ばしの傾向・危険

サタンは、死の力を有してはいないが  
人が、死を恐れ、死の不安に悩まされるよう  
あらゆる手段を尽くしている。



- ① 死を、考えさせない
- ② 死を、忌み嫌わせる
- ③ 死を、まだ、先のことと、錯覚させる
- ④ 死は、まだ、自分には関係ないと  
思わせる
- ⑤ この世の楽しみと比較し(させ)  
死を非現実化、死の意味を希薄化する

「わがたましいよ。

これから先、何年分もいっばい物がためられた。  
さあ休め（安心して）

**食べて、飲んで、楽しめ。**」

しかし、神は、彼に言われた。

『愚か者

おまえのたましいは

今夜、おまえから取り去られる。

おまえが用意した物は

いったい、だれのものになるのか。』

自分のために蓄えても

神に対して富まない者は、このとおりです。」

ルカ 12章 15 ～ 21節

I. キリストの受肉は、人が失った支配を回復した

II. キリストの受肉は、人を救いの栄光に導かれた

III. キリストの受肉は、サタンを武装解除し  
死より救出してくださった



IV. キリストの受肉は  
ご自身をあわれみ深い  
大祭司とされた

2章17~18節

したがって、神に関わる事柄について

**あわれみ深い、忠実な大祭司**となるために

イエスは、すべての点で

兄弟たちと同じように

ならなければなりません。

それで、民の罪のなだめがなされたのです。

イエスは

自ら試みを受けて、苦しまれたからこそ

試みられている者たちを

助けることができます。

イエスは、永遠に存在されるので

変わることはない祭司職を持っておられます。

したがってイエスは、いつも生きていて

彼らのためにとりなしをしておられるので  
ご自分によって神に近づく人々を

完全に救うことがおできになります。

このような方

敬虔で、悪も汚れもなく

罪人から離され

また

天よりも高く上げられた**大祭司**こそ

私たちにとってまさに必要な方です。

イエス・キリストの深いあわれみ

4福音書中 12例

エフライムは

わたしの大切な子、喜びの子なのか。

わたしは、彼を責めるたびに

ますます彼のことを思い起こすようになる。

それゆえ

わたしのはらわたは、彼のためにわななき

わたしは、彼を、あわれまずにはいられない。

エレミヤ31章20節

## 新改訳聖書中

イエス・キリストの、「あわれみ」の行為について

「かわいそうに思われた」 「かわいそうに」

「深くあわれんで」 「深くあわれみ」

と、訳された言葉は

「内臓が、揺り動かされる」

「はらわたが、わななく」

という、激しい痛みの、ニュアンスを持つ。

原語の中に

「あわれみ」を意味する、他のことばがあるが  
中でも、このことばは

最も強い「あわれみ」を、表現している。

「めぐみ」

水の流れる小川とすれば

「あわれみ」

水の湧き出る泉

「めぐみ」

めぐみを施す神の手とすれば

「あわれみ」

愛にあふれた神の心

ひとり息子の死を嘆き悲しむナインのやもめ

イエスが、町の門に近づかれると

見よ、ある母親の一人息子が

死んで担ぎ出されるところであった。

その母親はやもめで

その町の人々が大勢、彼女に付き添っていた。

**主は、その母親を見て、深くあわれみ**

「泣かなくてもよい」と、言われた。

そして**近寄って、棺に触れられると**

担いでいた人たちは、立ち止まった。

イエスは、言われた。

「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」

すると、その死人が起き上がった。ものを言い始めた。  
イエスは、彼を、母親に返された。



## ひとりの病人のいやし

さて、ツアラアトに冒された人が  
イエスのもとに来て、ひざまずいて、懇願した。

「おじーっで

私をきよくすることがおできになります。」

イエスは、深くあわれみ  
手を伸ばして、彼にさわり

「わたしの心だ。きよくなれ」と、言われた。

すると、すぐに

ツアラアトが消えて、その人はきよくなった。

マルコー章 40 ～ 42 節

## 2人の目の見えない人のいやし

さて、一行がエリコを出て行くと

大勢の群衆が、イエスについて行った。

すると見よ、道端に座っていた目の見えない二人の人が、イエスが通られると聞いて

「主よ、ダビデの子よ。」

私たちをあわれんでください」と、叫んだ。

群衆は、彼らを黙らせようとたしなめたが

彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。」

私たちをあわれんでください。」と叫んだ。

**イエスは立ち止まり、**彼らを呼んで言われた。

わたしに、何をしてほしいのですか。」

彼らは言った。

「主よ、目を、開けていただきたいのです。」

**イエスは、深くあわれんで**

彼らの目に触れられた。すると、すぐに

彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

イエス・キリストの助け

したがって、神に関わる事柄について  
あわれみ深い、忠実な大祭司となるために  
イエスはすべての点で  
兄弟たちと同じように  
ならなければなりません。

それで、民の罪のなだめがなされたのです。  
イエスは  
自ら試みを受けて苦しまれたからこそ  
試みられている者たちを**助ける**ことが  
できるのです。

私たちは、確信に満ちてこう言います。

「主は、私の**助け手**です。

私は、恐れません。

人間が、私に対して何ができましよう。」

へブル ー3章 6節

## 本日のまとめ

- I. キリストの受肉は、人が失った支配を回復した
- II. キリストの受肉は、人を救いの栄光に導かれた
- III. キリストの受肉は、サタンを武装解除し  
死より救出してくださった
- IV. キリストの受肉は、ご自身をあわれみ深い  
大祭司とされた